

「耳ざわりのいい言葉には気をつける」と昔から言われます。心地よく響く言葉には、人の理性を狂わせ酔わせるものがあるようです。企業コンサルタントの小林氏が若い頃のことです。社内の研修部門で経験を蓄積し、いよいよ現場へと巣立つことになった時、先輩から「現場へはなむけ」の言葉をもらいました。「現場に出ていく君に、一言いっておきたいことがある。当社の顧問企業には、人生の辛酸を舐め、それを力強く乗り切ってきた多くの先輩がいる。その先輩たちが、まだ若い君を『先生』と呼んでくださるだろう。その言葉に対し君がどのように反応するかで、君の人生は決まるといっていい。先生と呼ばれるたびに、自分はそんな中味の人間ではないと恥じ入り、先生と呼ばれてもおかしくない自分になるうと励みにするのであれば、大きく道を踏みはずすことはないだろう。『先生』という言葉には注意するように」

顧問企業の指導にあたるようになった氏は、目の前の相手から「小林先生」と呼ばれるたびに先輩の言葉を思い起こし、ひたすらに自己を高めようと努力しました。

しかし人間とはやつかいなもので、そのうち先生といわれることに慣れていったのです。ある日のこと、顧問先の若手社員を中心とした会合に小林氏は顔を出しました。先月に課題として与えていたものが全員手つかずの状態であったことに、思わず小林氏は一人ひとりを名指しで厳しく責め立てたのです。

「普段からだらしない生活をしているからこのザマだ。だいたい君らはやる気があるのか」と机を叩いて怒鳴りまくったのです。すると年端もいかぬ青年が突然立ち上がり、



甘い言葉を聞いたら 自己を引き締めろ

絵・わたなべじゅんじ

「小林君、そんな言い方はないだろう。自分たちはそれぞれ業務をこなしながら取り組んでいるんだ。確かに課題をやらなかったことは僕たちに非があるが…」と言ったのです。

小林氏はこの青年の「小林君」という言葉を聞いた瞬間、こいつ、俺を君づけで呼んだな。なぜ『先生』と言わない！と逆切れしかかったのですが、冷静になる中でかつての先輩の言葉を思い出したのでした。

そういえばここ数年、「先生」という言葉に酔いしれ、戒めとして常に精進することを忘れていたな。なんと情けないことか！

年長者を君づけで呼ぶこと自体は誉められたものではありませんが、しかし小林氏は今でも「小林君」と呼んでくれた青年に感謝しています。「彼があの日、『小林君』と呼ばなければ、もつと鼻持ちならぬ人間に自分はない。まさにあの時の一言は、私を正気に引き戻してくれた」と述懐します。

この「先生」という言葉に匹敵するものに、「社長さん」という呼ばれ方があります。「社長さん、社長さん」と言われているうちに、自分を見失う経営者が少なからずいるようです。必要以上に背伸びをして脇が甘くなり、妙に気前がよくなつては不必要な金をばらまいてみたり、どうでもいいことを引き受けたり…。時には連帯保証の押印をした後、その処理に非常な苦勞をしてみたりと、とかく耳ざわりのいい言葉には注意が肝要です。

足下をしつかりと見つめ、自分がやるべきことに情熱を傾けるのです。そして名実ともに「社長」と呼ばれるにふさわしい人格を確立するのです。「社長」として恥ずかしくない人物へと自己を磨き高めていきましょう。